

紀伊國名所圖會

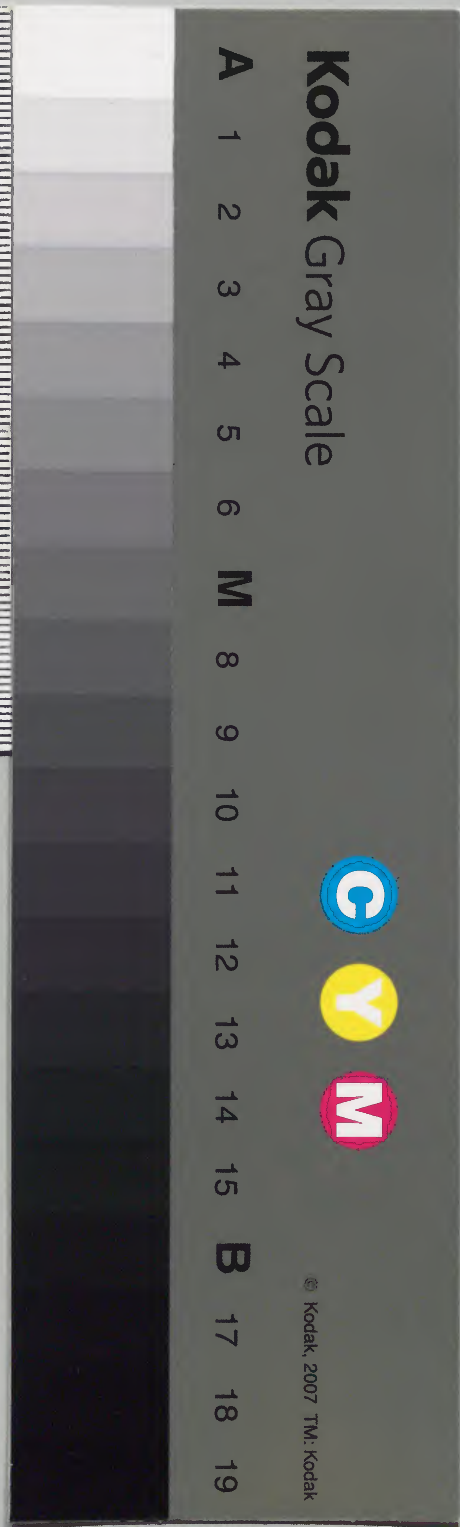
後編

二之卷
海部郡
在田郡

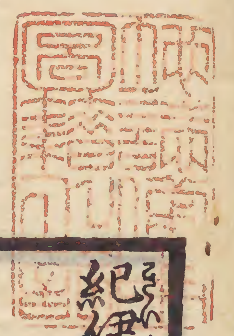
和書門類		三六五五二	一二二	一三架	六册
------	--	-------	-----	-----	----

内閣文庫		和書類	三六五五二	一二二	一三架
------	--	-----	-------	-----	-----

内閣文庫		
番號	和	36552
冊數	6 (2)	
函號	176	11



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



紀伊名所圖會後編卷之三
目錄

- 熊野御幸圖
- 柿本神社
- 海部
- 地藏寺
- 岩屋山
- 仁壽
- 立神社
- 蘇坂王子
- 蜜柑菴造圖
- 加茂城址
- 梅林
- 熊野懷紙
- 辰松樓
- 加茂谷
- 御所芝
- 裏貝瀧
- 竹園社
- 加茂驛
- 市坪
- 地藏堂
- 釋迦堂
- 津田瀑布
- 内原驛
- 紀直放居
- 藤代作
- 塔下王子
- 玄橋
- 仁義越
- 蜜柑
- 山路王子
- 荳坂菴
- 山井岩菴墓
- 冷水越
- 名方瀨宮
- 山名氏墳墓
- 温石
- 加茂川
- 松尾瀧
- 橋本王子
- 本村先生祠
- 白倉山
- 加茂神社
- 大崎浦

白木濱
白魚取の國
丁村
文坂
小原越
椒御殿跡
荊藻葛
右券
宮原莊
八幡宮
御茶屋芝趾
岩室城趾齒
莫多郷

方便海
塩濱
濱中郷
小為平山
淡黄石
地葛
在田郡
蜜柑齒
荳坂王子
玉坂齒
天神社
徳寧行者徳寧行者
荒田皇女

白石
硯井
長保寺齒
儲捨山
椒村
沖葛
阿提
郡中神事
地藏堂
宮原驛
在田川齒
御所井
牟婁沙弥齒

梶原城址
栗嶋神社
地藏堂
明秀寺
慶西福寺
長屋王墓齒
右郷名
郡中言語
山口王子
宮原宗貞齒
安諦川
圓滿寺
保田莊

紀四編二之二

在寫明惠傳記
須佐神社齒
星山
淨應寺
淨妙寺
望月社
水粉
得生寺齒
糸我里

稱名寺
堀貫
宮崎莊
北湊
飛鳥社
安養寺
本宮寺
福持社

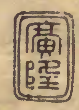
保田城跡
高田浦
箕嶋吳事
旅明神社
宮崎
宮崎氏城址
糸我莊
糸我王子

須佐郷
神光寺
徳園社
外濱
矢櫃浦齒
立神社齒
慶仁寺
糸我山杖部



後鳥羽帝
 悲形を序書
 のとと友
 白柳木の
 其の仍官
 と依り
 多ふ海

白柳木





Vertical Japanese text in the upper left corner, likely a title or descriptive text, written in a cursive style.

其二



南

制伏望因親母之居賜藤代宿禰勅賜吉原宿禰貫于左京

海部

加茂谷

藤代峠

山名氏墳墓

地藏峰寺

勅進聖揚松山心靜

元享三年十月廿四日

大之薩戶權守妙經

紀四編二六八

藤代峠より南二十八ヶ村ありて其地を海部と云ふ

藤代峠より北二里許あり藤代宿禰を賜ふに依りて

名草海部二村の塚あり坂及十八町北此の地

を明徳二年京少納言入して一色冷範同藩範父

小基墓ありんす覺東が一物くハ原世山名氏の

地蔵峰寺 峠あり藤代山延命地といふ天台宗

御所芝

地蔵芝の西半町あり今を藤代と云ふ地あり

いへれども山名氏の上を居るをいへり

此地懸崖第一の美景なり其勝景をいへり

乃奇景累くして眼下も連星定一魚鱗山

を然て高城嶺より以南の地乳山あり

落の基布を坐して一と指懸け然り

風懐一と云ふ奇景ありて其を望む

及拾遺集 志也すなりありて以上の意を

源平盛衰記元暦元年維成熊野湯の條云

志也すなりありて以上の意を

當寺
 本尊
 の告
 のり
 蓮如
 上人
 加茂
 谷
 門徒
 を以て
 迎
 境内
 上人堂を建つ

岩屋



春の峠

橋の本
 土橋
 邊の
 図





窟中
石鐘乳
あり



窟山
境内
裏見
滝の
図

建仁元年十月九日略道崔嵬殆有恐又眺望遠海非無興奉

塔下王子

○温石 峠ありやりの坂小巖あり短くして

紀伊國 温石

○温石 温石といふを温くを温基堅くして

石屋山福勝寺 寺あり二町許在り寺あり古義寺堂の内二町

物多し寛れ乃頃堂内ありて七日乃百波摩現りありて或者
中堂外も夥しと物多あり堂内ありて板板も大なりと乃波二
ありとみくく人々参りて天拍の手のゆとつてて

表石 福勝寺の境内ありて大巖ありて屹立し其下噴

と名づけり多しと温く老松在り松林然として幽寂なり

家集 温石の吹雪の如く振来れて白雲の糸 源令綱

石川志登母岩室記

温石乃木立かざりてとけりんはものふとてはくく
温石の吹雪の如く振来れて白雲の糸 源令綱

温石の吹雪の如く振来れて白雲の糸 源令綱

○土橋 加茂川小架

加茂川 原東南の山より流る土橋の上より合流し東より流る

て市坪懸村の川流を懸て於橋を架りて板橋石を

仁嗜

仁嗜 仁嗜といふは仁と嗜とを専ら義と

女園社

女園社 揚子村乃東宮村四村ありて舟山光雲寺の境内ありて

允許愿皆以石為神
 凡神嶽巖祠之處皆
 有巨石數變堆立設
 香爐炷香燭於前燒
 酒設牲菓砌愿皆就
 石致供不設神像也
 已中山傳信録亦書
 之凡也



引尾村
 立神社地
 奇峯の圖





仁義越

同村乃北峠ナゲ十三町石并於岷山ナリ此峠を越へ南庄

松尾滝

引尾村乃東山ナ

立神社

同村乃小谷尾筋ナリ仁義四村乃産去神ナリ其神

鬱然々々社乃乃々々奇々々々其甚ハシクハ派々々々立神と

祢々其其一々々々々々未殊抜ハガハ許源ハ一丈許越ハシテ

を吹ハシルハシトハシルハシルハシルハシルハシルハシルハシル

といハシルハシルハシルハシルハシルハシルハシルハシルハシル

て祀マシルハシルハシルハシルハシルハシルハシルハシルハシル

後乃季々々々々々四おの氏子々々社乃大枚と廻リ々々々々

雲祭法爾々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

石神ありて早に面々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

左尾乃遺禮々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

左尾乃遺禮々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

記四編二十三

此之法ふありて木同小長かれど南社ナリハハハハハハハハハハハハ

○さよさあ上もつねさてイヤカ七のまぬル恭るナリ○

ちろやふ里くるあめれありイヤ代トをさぬるみつご

もの○このむるイヤをみねづこのイヤそらもひとつお

河めかあ○枚乃木落で月々禮をイヤをしくして

雨がふる○カビく編祭もサヌキして民を恵の神垣や

○かもの川敷乃サ末ヤゲトくみてよろこぶサみろろ

イヤ○みねろみねおくのめとくみてろふがハ其祀ハ

イヤもおろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ

雲小霧々々いぶさ山

加茂驛

橋本市坪乃二村を驛所

産物蜜柑

野中法村蜜柑を推て産業乃助けとハ其味ハ二十四粒の産ハ

南海詩集

自是江南橘柚郷耕漁同利滿山霜千筐萬囊年年緑

菜殺蟠桃千歳香

祇源瑜



大窪村
尸祝
木村先生
當初貧
困流離の
民を集
め己も共
ふ耒耜を
とり百方
勸農の
図





加茂谷の諸村よて
 蜜柑籠と製る圖
 此更元和の比也
 本村氏在田於
 田口村よて製
 造の法を以て
 大産村の民
 亦を以て
 法を以て
 始りし
 あり



蕪坂峠
茶店眺
望の圖

河津出

ふのしづや

まじり

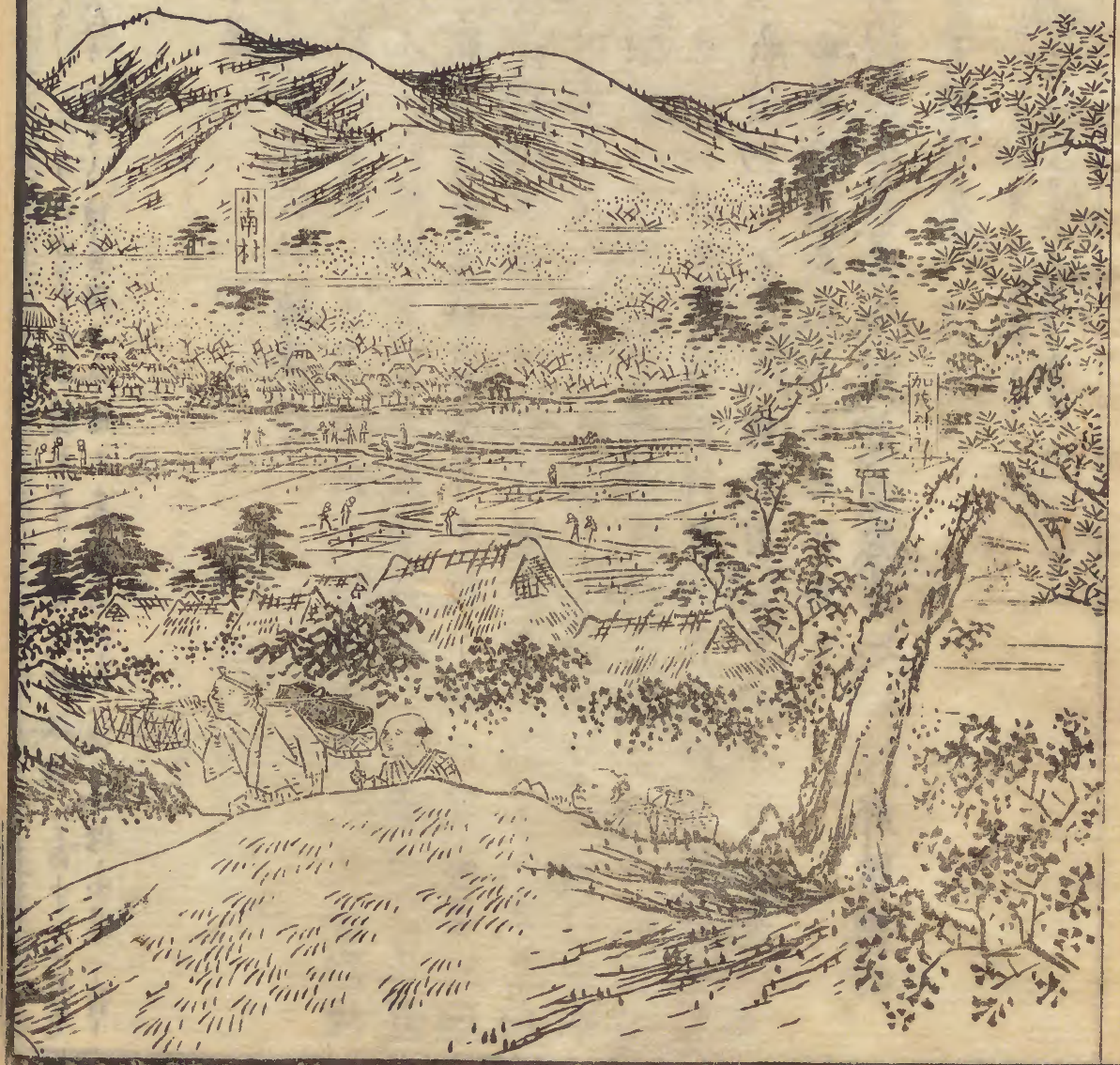
米叙



谷川の
 せしはつた
 ゆきあがり
 又れも
 あらぬ
 ろりたふた
 拾栗人



名草那冷水浦
 ようし海士那塩津
 浦への中
 少くか
 梅林



大寄浦の図

夫木抄 前中納言経光

とくをきとらよの

うけしを久しを統

すうこてなすねる

大崎乃木

名寄 光俊

らうやふち

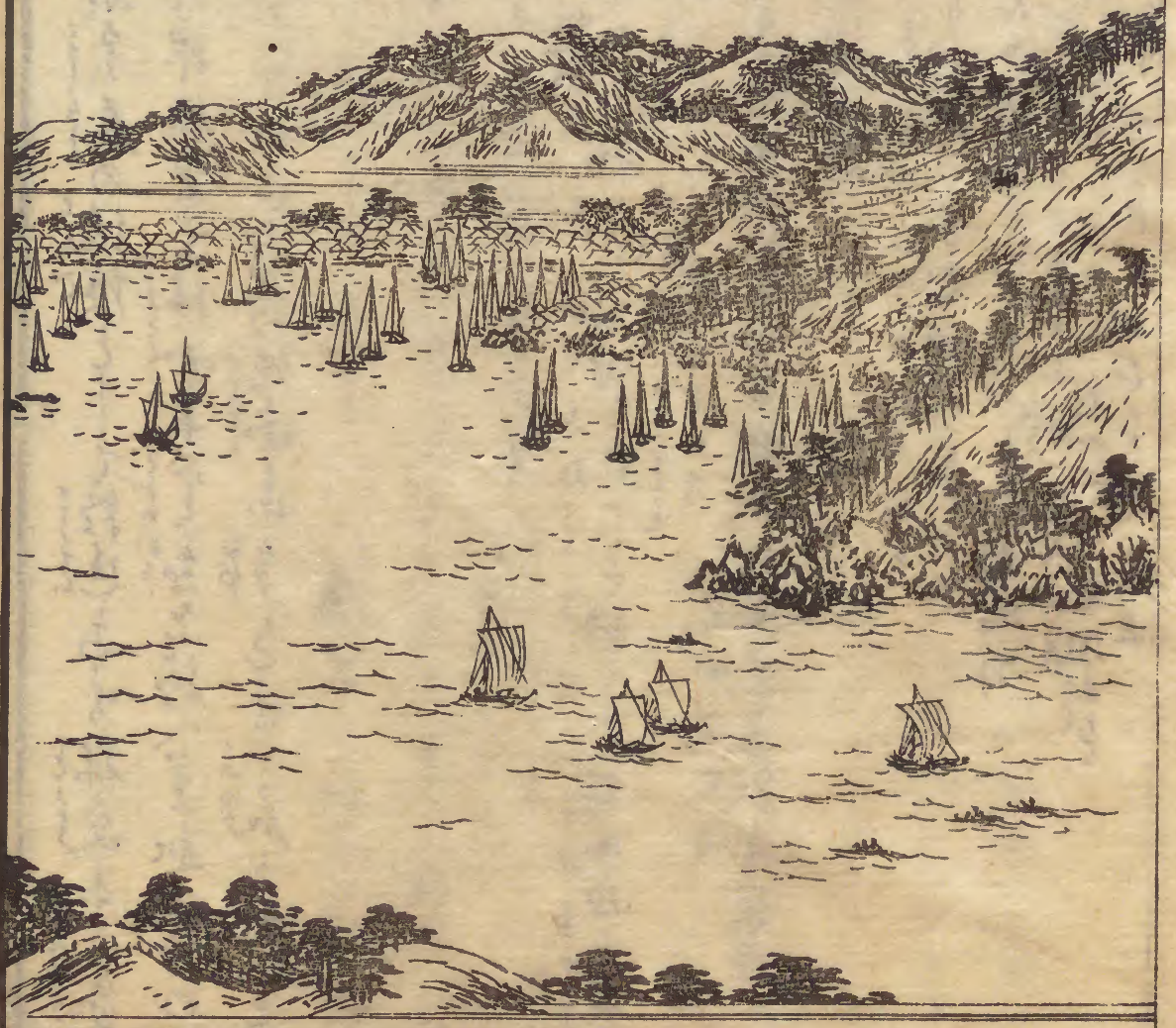
舟乃少彦

舟ささく

大崎乃木

舟ささく

とく



白木抄

大崎乃白石入古書

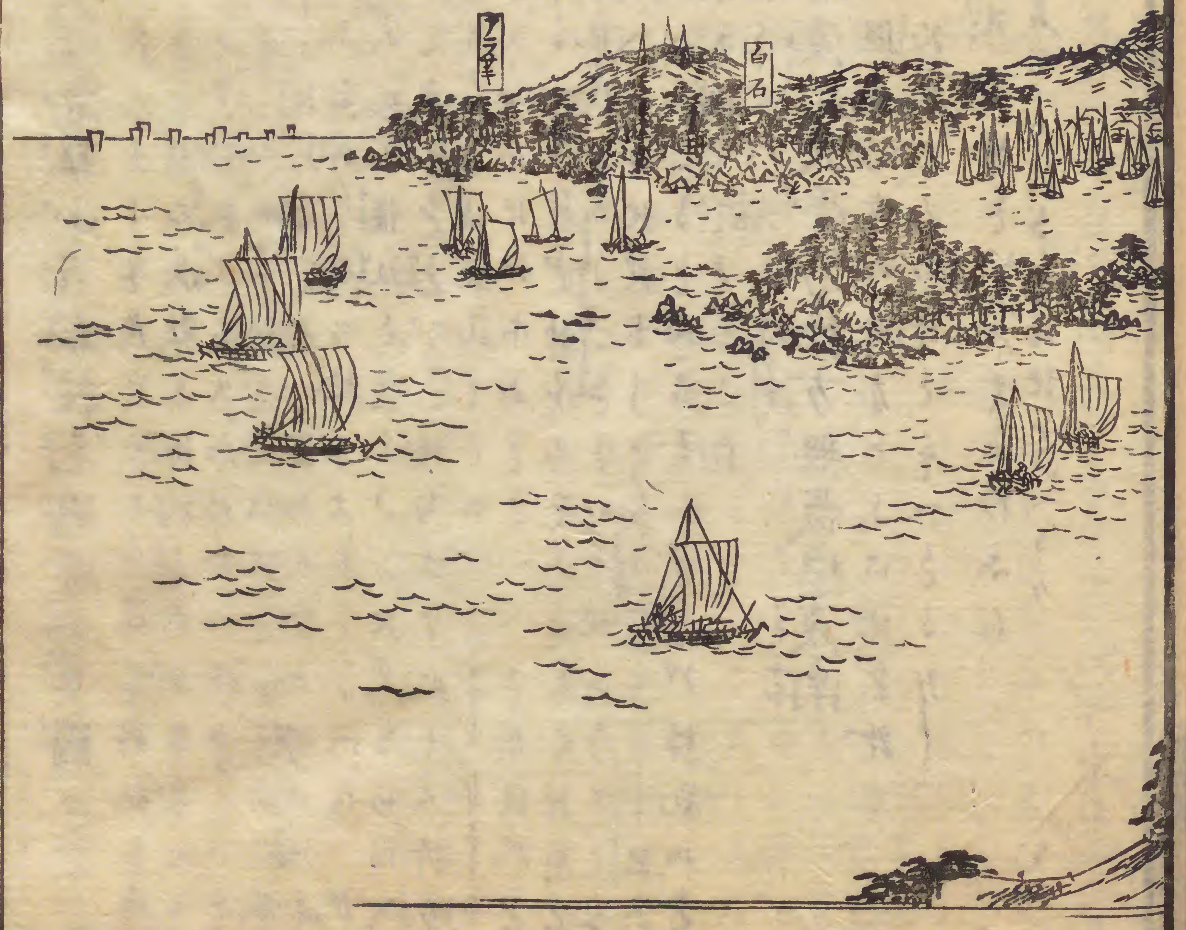
紀伊守石とんえく

公心か玉芳ふ用わ

とせうしなをさうり

右ふまふ棟とくと

制禁ふ





方々川口赤て
白魚を取る圖

白魚也

又ゆれり

口於実社月

西宮記臨時部云

位以上並聽着用紀伊石帶白指者六位以下不得用之

紀伊石無文王等公卿除節會行奉大饗列見考定立后任大臣相撲召合慶賀等時之外着用無文

映玉雖有文四位五位用之略

和名鈔云

革帶 唐衣服令云革帶玉鈎今按革帶以其好為名故有白玉附金玉石角等

帶隱文帶馬腦帶波斯馬腦帶紀伊石帶出雲石帶越石帶班

犀帶烏犀帶散豆帶等之名其體有純方丸鞞擲上等之名革

帶是其總名也

梶原城址

大崎浦乃山上ふあ至今細地しかりに梶原村梶原城址

産物白魚

加茂川の海に多く産す

塩濱

加茂川の海に多く産す

硯井

同村山麓の硯井あり

湧出

湧出日濱泉といひ是も亦鹽泉濱泉の類なり

栗島神社

同村小名中ふあり海邊に加太の栗島と同時

丁村

同村の東にあり

濱中郷

和名沙及葦原記下卷中區連祖公麻呂者海於郡濱中郷人なり

慶徳山長保寺

上樹あり

本堂

方七間 奉書 持迦如未額字 右多寶塔 東護摩堂 左換

食堂

左阿彌陀堂 九鐘樓堂 大門 金剛力士あり

本坊陽照院

子院 專光院 最勝院 本行院 地蔵院

西福院

西南院 昭光院 普賢院 昭光院 地蔵院

寺傳云

一際院の勅願所にて長保寺の草創あり

故の寺号

と以字臺と慈覺大師の門徒あり

西福院

西南院 昭光院 普賢院 昭光院 地蔵院

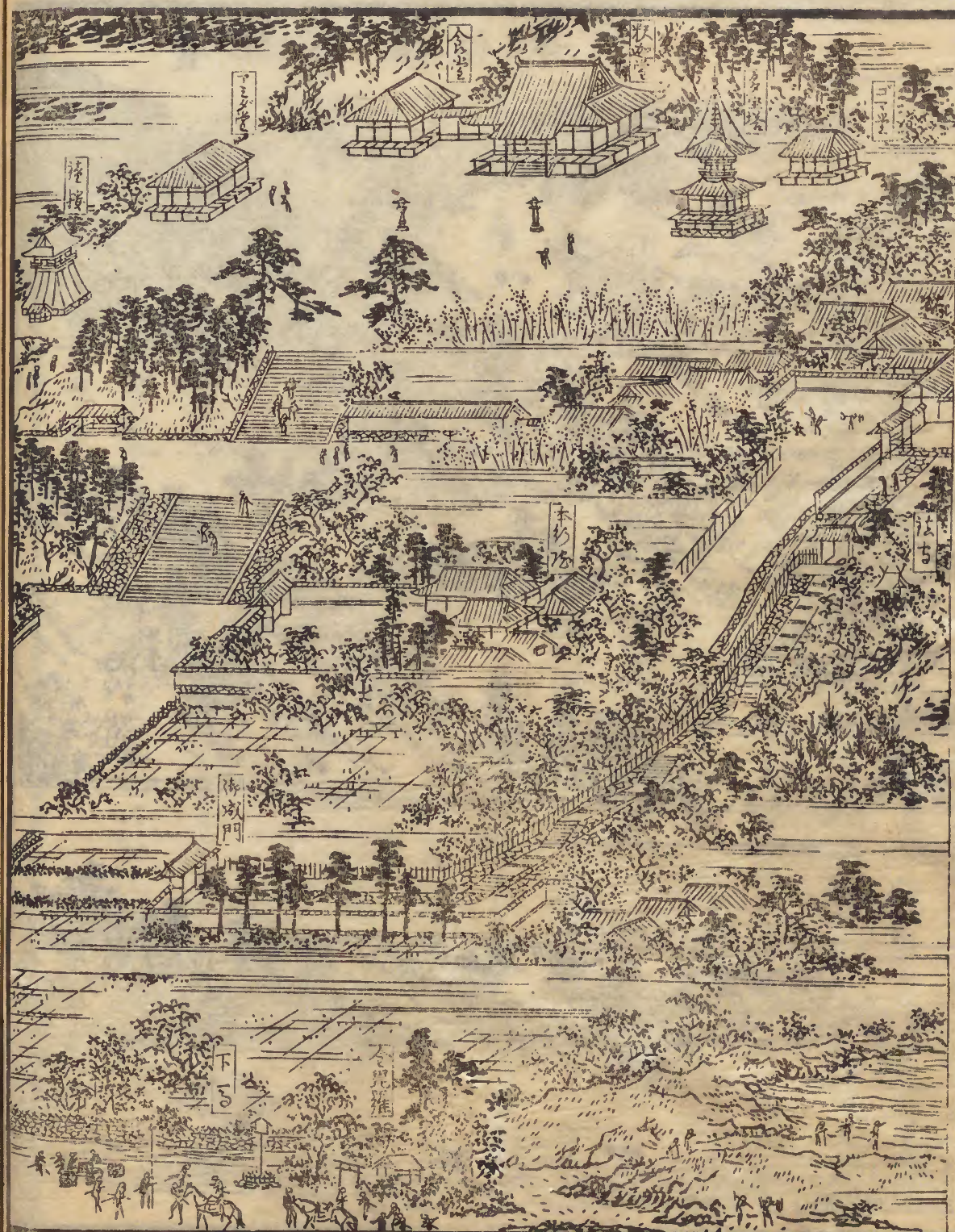
寺傳云

一際院の勅願所にて長保寺の草創あり

故の寺号

と以字臺と慈覺大師の門徒あり

其二



山頭孤殿在 造建是何朝 空廂蒼苔鎖 斷碑古心搖
濕衣春靄起 注目暮江遙 四顧傷神處 老僧獨寂寥

同 溪上幽居不用扁 靜兼魚鳥欲忘形 滿山紅葉皆如

醉一樹青松似獨醒

地藏堂

乃基とつふ交も 隨り人かりりしや

女坂

同村乃れあて 峠を在四社の場と云 乃れ其の小為手山と

小為手山

山年妻都ありといへれ 今之墓坂 乃れ其の山サリ 乃れ安太

安太郎去小為手乃山之真木葉毛父不見者 羅生爾家里

緒捨山

乃れ其の山 乃れ其の山 乃れ其の山

乃れ其の山 乃れ其の山 乃れ其の山

乃れ其の山 乃れ其の山 乃れ其の山

乃れ其の山 乃れ其の山 乃れ其の山

家集

夕れみまの 彼ふる 葉小松とほくの 山の松のふさふ

明秀寺

乃れ其の山 乃れ其の山 乃れ其の山

小原越

乃れ其の山 乃れ其の山 乃れ其の山

浅黄石

乃れ其の山 乃れ其の山 乃れ其の山

椒村

乃れ其の山 乃れ其の山 乃れ其の山

廣西福寺

乃れ其の山 乃れ其の山 乃れ其の山

仁和寺

乃れ其の山 乃れ其の山 乃れ其の山

仁和寺

乃れ其の山 乃れ其の山 乃れ其の山

仁和寺

乃れ其の山 乃れ其の山 乃れ其の山

仁和寺

乃れ其の山 乃れ其の山 乃れ其の山

仁和寺

乃れ其の山 乃れ其の山 乃れ其の山

仁和寺

乃れ其の山 乃れ其の山 乃れ其の山

仁和寺

乃れ其の山 乃れ其の山 乃れ其の山

仁和寺

乃れ其の山 乃れ其の山 乃れ其の山

仁和寺

乃れ其の山 乃れ其の山 乃れ其の山

秘

死行 御室御領西條内薬師堂

當仁公文定景

列南藏寺

右彼列南藏者定景可令進止者臣百姓
等可と存知禁作伴

去曆八月七日

西福寺

西

足利尊氏公草名

右軍勢并甲し余ふり政乱入狼藉者

紀四編二七九

有遠死北平一々の雲を斜状に伴

建武三多十月廿七日

柵御殿跡

椒濱村小石

永田平庵

風拂雲相月正團江流千里泛金盤更無一物遮清影

應是乾坤別様者

地名

柵村より七八町西海中あり是地の鳴る海へて地の或ハ四つ
あり其北岩石稜々として美観なり

沖島

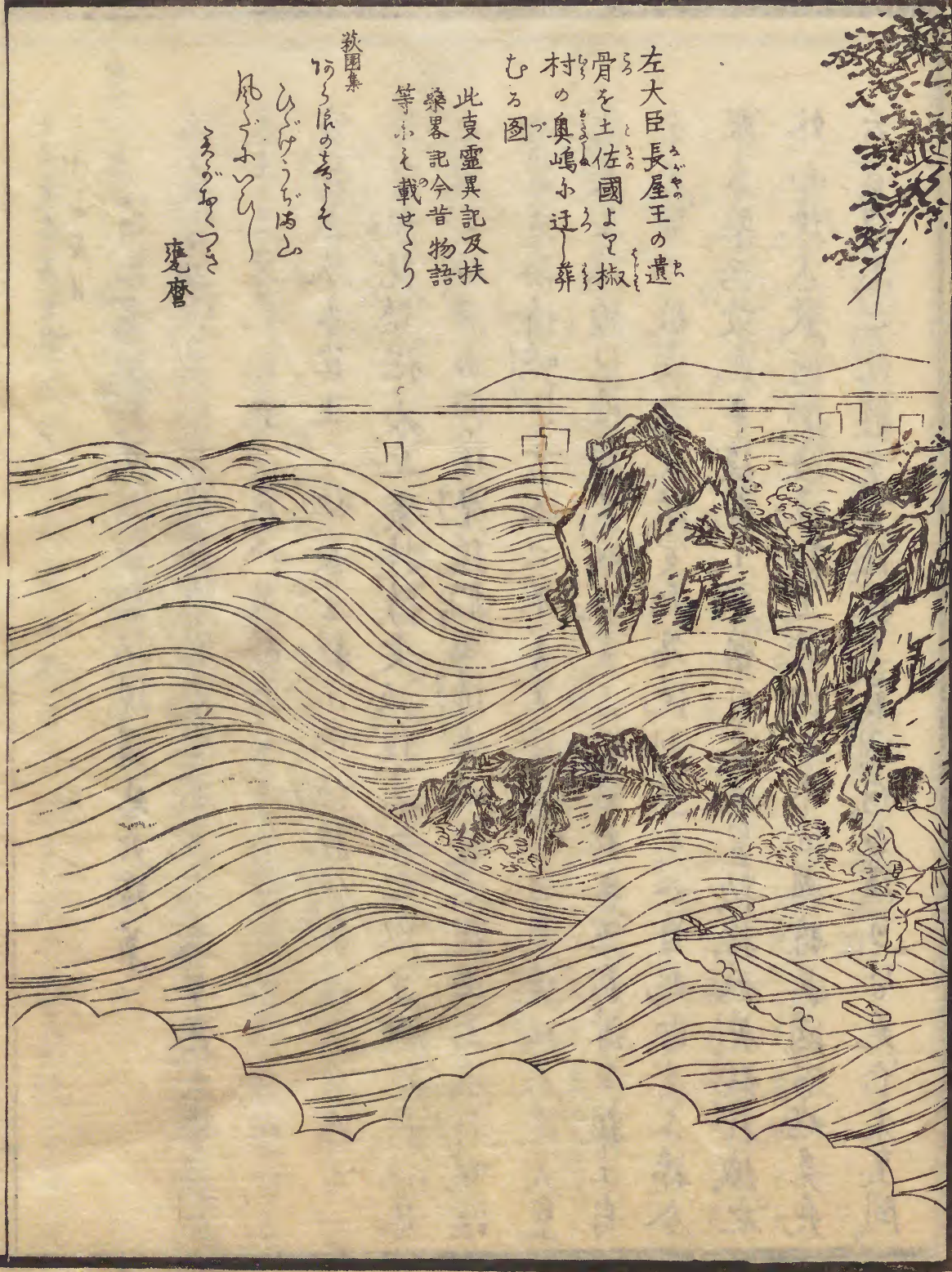
地の西海上十一町あり是の中偏と第とありて柵本一林あり
あり其北岩石稜々として美観なり

賞状

左大臣長房墓

沖島ありとソハ傳ふれども墓址深かりん

聖武天皇の御世左大臣長房が政事一を以て死を賜へり
於陵君等中臣密應連東人等が深きふりて死を賜へり
ふちして聖武天皇と火葬せり大日本書紀及聖武天皇考
考院本深きふり



左大臣長屋王の遺
 骨を土佐國よ
 村の真嶋小
 むる図
 此支靈異記及扶
 桑畧記今昔物語
 等小と載せり
 救國集
 阿久根の志士
 ひんげうらほふ
 風ふふ
 まるくつ
 堯磨



采同と考せられ
いふも思ひ

靈記中巻

特已高徳刑賤形沙弥以現得惡死緣第一

諸樂宮御宇大八島國勝寶應真聖武太上天皇發大誓願以
天承元年己巳春二月八日於元京元興寺修大法會借養之
寶勅太政大臣正二位長屋親上而任於借衆僧之同時有一
沙弥盤就盤借養之處捧捧受飯親上見之以牙冊以罰沙弥
之頭破流血沙弥摩頭損血怖失而乞不親所去不知時法
會衆道俗偷曉之言凶之不善矣遂之二日有嫉妬人誘天皇
奏長屋謀願社裊將奪國位爰天心瞋怒遣軍兵陳之親上自
念无罪而被囚執此決定死為他刑斂不如自死即其子孫令
服毒藥而絞死畢後親上服藥自害天皇勅捨彼屍骸於城之
外而燒未散河擲海唯親上骨流于本仇國時其國百姓多死
云百姓患之而解官言仇親王氣國因百姓可皆死亡天皇聞

四四二

之為近皇都置于紀伊國海部郡掛村奥嶋下

因小六法本椒掛奥嶋の流す抄を村の海嶋の流す
北ハ今改む既小介を物産の流すを記して奥嶋と云
を里村の流すを奥嶋の嶋の字を流してを本と云りて
乃基と流すに人流北王
乃基と流すに人流北王
あアてこれ
とハ異なり

在田郡

南に東と伊勢郡及大和國を於たふ場
二於ふ流り北を伊勢郡有る名茶海部郡於小規牙根掛んこ

乃方海部郡なり

阿提

當郡の地名なり持統紀三年文武元太寶三年靈記
記丹野門等を見えたり全文下の條より載ん

日本後紀

大同元年秋七月戊戌改紀伊國安諦郡為在田郡以詞涉天

皇諱也帝王編年記伊呂波字
類抄等の法書皆同

因ふいふ天皇の御名を巡りて姓氏地名等を改るるに

續日本紀小延曆四年五月丁酉詔曰臣子之禮必避君父
諱此者先帝御名及朕之諱公私觸犯猶不忍聞自今以後
宣並改避於是改姓白髮部為真髮部山部為山と見え
るは後之始也 平城天皇の御名阿堤を避けて南
郡を在田郡と改め 嵯峨天皇は御名神野を避けて伊
豫國神野郡を新居郡と改め 淳和天皇の御名大伴を
避けて大伴氏を伴と改め 延和天皇の御名大伴を
御名を乳母の姓を以て延和に或は御名代を定めて
て流名を永世の傳へ給ふ所なりしは延和季中漢風を
倣ひてくく新制を建給ひしを 平城天皇以下擾
る用の延へる所なり然れども御名くく同くく御名を
改め地名を改めんと煩らひくく混へて後ハ
仁明天皇より以降は姓氏地名も福もざる御名を用ひ

記四編二九二

延和天皇より 淳和天皇より

てみ帝より 廢る上右の若も倣えて廢れり

右郡名
續日本紀

嘉祥元年二月癸酉紀伊國在田郡為上郡以戸口增益課丁

多數也 戸令九段以上十段以上為大郡十二段以上

上為小郡とあり里數乃里數あり即郡のり也

右券

在田郡司解 申依式賣買新田并家地畠地等立券文事

合地伍町參段佰肆拾肆步 惣價直稻參仔添拾肆束

新田參町佰肆拾肆步 直稻貳仟貳拾肆束

一所加統村七段二百十六步 直稻六百八束

右券 系本寺東寺中藏券文ハ伊都郡の郡印八十餘捺これ
と形似てありわさふ真海法抄伊都郡の郡印八十餘捺これ
印大くさふ捺しをくを改めし海ふ
或これにほふ署く券文ハ全九ふ事

門田五段 四至 東至百姓口分田 南至細分 西至百姓口分田 北至數系 直隸四百束 為別八十束

阿弥施道田百卅四步 四至 東至百姓口分田 南至百姓口分 西至百姓口分 北至百姓口分 直隸卅束 為別八十七束

垣内幡田西圭一段 四至 東至數系 南至百姓口分 西至百姓口分 北至百姓口分 直隸七十五束

垣内幡田七十二步 四至 東至畔 南至百姓口分 西至百姓口分 北至百姓口分 直隸十八束 段別九十束

大町南圭一段 四至 東至國 南至百姓口分 西至數系 北至百姓口分 直隸八十束

一所丹生村九名七十二步 直隸添伯參拾陸束 為別八十束

荒木回二名二百十六步 四至 東至子午畔 南至百姓口分 西至百姓口分 北至百姓口分 直隸二百八束

中荒木田二百十六步 四至 東至大津 南至百姓口分 西至百姓口分 北至百姓口分 直隸卅八束

高苗代田二段 四至 東至百姓口分 南至百姓口分 西至百姓口分 北至百姓口分 直隸百六十束

島回二名 四至 東至坂上清水地 南至百姓口分 西至百姓口分 北至百姓口分 直隸百六十束

北聖斑原田二名 四至 東至記臣常島 南至畔記臣常島 西至百姓口分 北至百姓口分 直隸百六十束

一所大豆田村聖田九名二百六十步 四至 東至社并聖 南至記直塚九衣并聖 西至百姓口分 北至百姓口分 直隸四百八十束 為別五十束

四四三三三

一埤一名 同村聖田

一埤三段百廿步 同村聖田南圭

一埤一名二百廿一步 同村右森南圭

一埤二段二百廿五步 同村左森南圭 直隸四百束 段別百束

一所同村梶原田四段 四至 東至記宿你千步治田 南至百姓口分 西至記宿你千步島 北至天河 直隸四百束

炭地一町三段 在吉備 直隸伍佰伍拾束

一所云名 在丹生村 四至 東至百姓口分 南至百姓口分 西至百姓口分 北至百姓口分 直隸百五十束 段別五十束

一所一町 在聖村 四至 東至栗栖島 南至記臣波自女地 西至右垣分栗栖村 北至聖田大津 直隸四百束 段別卅束

一島一町 在吉備中島村 四至 東至北寺地 南至神杖知島地 西至北島倉地 直隸參佰束 為別卅束

右得擬大願紀宿你真實狀傳已新向并炭地畠地寺依式常地而活撞為都
備燈大法師位真濟大臣既託老依解狀郡加勘察所申有實仍為後勘賣買
兩人署名立券文如你以解

專賣外延八位上紀宿你真實
父記六位上紀宿你 千奉

紀名録
澄刀津氏直
成人
貞男
今麻呂
紀名直

仁壽四年六月七日主帳外少初位下大海連

副控大願外位下紀朝臣
擬少領元位紀朝臣

國術參通 買人新

守元位下紀朝臣高

正 位上行久紀朝臣

正六位上行様當麻真人
後六位上勳八等行権様伴宿祿
元七位上行大目守臣
元七位下行少目破破連

産物蜜柑

皇國橘類の生い出は種藤神代の記も根ざり
しう持海外より渡り来しう惟も知らざる程と云同也

按んば赤文の舉るる和代丹生大寺田小島郡村の
村今と丹生小島の二村のみ記載れ其地甲地乃字及人
名等分ぬなり

かかりしう皇使傳ゆを載りしう然もことども願
けし常世の國も索々海路ひし記ありハ海内ハ
未培事のせざるしう或非時と何れを今の盧橘乃類
ありしう赤州此乳柑といはれの頂より
を海より氣麻莊なるを皇し一も携れて氣味
其美かれを近々の柑もおもお携いて橘柑とせ
吾々のゆきしう橘よるる谷蓋のさるる際より延衰
聖乃るる葉万株の乳柑茂林成りて今も下最
大の産物とてかありぬ其是時中を東風海上で渡りて
阿波の境も魚越りて皇皇熱の候もを学新頼と
て新職も新と讓れり九月に皇皇乳を携りて此
進教と頂それしう皇皇乳を携りて此
乳も少く系板ホハ小乳ホテ携りて皇皇乳
阿波新計大船も接して皇皇乳を携りて皇皇乳
乳も少く系板ホハ小乳ホテ携りて皇皇乳
を携りて皇皇乳を携りて皇皇乳を携りて皇皇乳

南海集 秋源瑜
 黄柑南土出 枝叶亦
 婆婆结子五六月 金
 丸霜後多可同 橙供
 客不若摘除病 若不
 及時採其如 敗絮何



那中
 山畑
 蜜柑を
 こる園



其 二
 山畑より採りし茶
 茶葉顆粒を
 揉みかちるなり
 角ふ切つて其上を
 覆ひ大串の茶を
 拵振のさ大振く
 のめ



其 二





其三

北漢の海口亦築出し
 其の傍塘の上へ船中
 佐よりのと船棧を
 蜜柑翁を山のてく
 影をく果積をもつ
 とも程保とるも北海
 法のつる小元海に



みうんうで
 安井新小舟
 木のやま地をよ
 かしら大船ふつ
 こころ



郡中神事

主田の... 本居宣長

十... 市... 彼... 楫... 澤... 去... 寒... い...

冷谷集

主田乃... みる... みる...

郡中... と... よ... し... 然... 等... の... 十... も... ら... け... れ... 是...

をカキ... 法社 駒馬祭日次

諏訪社 七月廿七日

清水八幡宮 八月十五日

生石社 九月五日

丹生社 九月十日

御霊社 九月十五日

稻荷社 九月十五日

郡中

郡中... 其一二... 古風の...

廣八幡宮 八月十五日

岩倉社 九月二日

天満宮 九月九日

須佐社 九月十四日

立神社 九月十六日

龍王社 九月十八日

宮原莊

萬坂王子社

次昇カブラ坂参カブラサカ塔下王子又崔菟次参山口王

地藏堂

地藏堂... 記云云乃... 小靈異記...

山口王子社

八幡宮

社傳云弘仁七年... 乃... 某等...



玉坂の故事



在田川
宮原渡場
の図

黄柳渡頭雲
影寒清流不
速受舟寬香
魚秋老腮如
鐵木葉落時
吹浪團
土城大夫



兩岸霜楓
一葉舟
畫圖難寫
滿川秋
急湍飛沫
夜米雨
魚自黃柑
影裏流
小出元明





い
ま
し
ら
る
岩
室
の
合
戦
の
図



後入於塗漆皮筥不安外處置於住室之翼階時々讀之神護
景雲三年歲次己酉夏五月廿三日丁酉午時發火惣家皆悉
燒滅唯彼納經之筥有於盛燭火之中都無所燒損開筥見之
經色儼然文字宛然八方人視聞之無不奇異諒知河東練行
尼死寫如法經之功茲顯陳時王与女讀經免火難之力再示
贊曰貴哉榎本氏深信積功寫一乘經護法神衛火呈靈驗是
不信人改心之能談邪見人輟惡之頑師矣

保回莊

宮前那の西本ありてみヶ村を經て庄名數仁本復弘名等の
文あり又見えたり弘名等の文ありを地代左の耐宗業とあり
或は保回の字數と安回と
おんといふを安説かり

左寫明惠傳記

山田系村位勅を付といふ者ことと存以意と地蔵寺の竹
物かりといふ事あり記より書神をよと此傳記漢文
て記し板本等と異同ありありといふ事
此傳記とて引用するべし

護念山切徳院孫名寺

此堂村あり傳記宗法永元寺の建
り製と志長氏の郷地といふ事
を志長寺中當より移しといふ

保田城跡

同村あり保回莊司貴志掃部之助宗純の跡といふ地
と宗純といふ事あり志長寺左邊ありと傳記あり

須佐那

和名沙入出づ那名今廢りて
社ありと傳記あり

須佐神社

十四村の南中山の嶽あり境四方町保回莊あり
村の産土神といふ事あり

本社

祭神素戔嗚尊 神樂所 宿直所 神輿舎 四柱門
御太刀寶藏 御装束間 御祈禱所 厨

五位上

紀伊國在田郡須佐神社

在田郡從一位須佐大神

貞觀元年正月廿七日甲申奉授紀伊國從五位下須佐神從
本居宣長
延喜式神名帳云
本國神名帳云
冷泉集
須佐大神社といふ事あり
紀伊國在田郡須佐神社月次新嘗
須佐大神の御山かたて本居の事いふ事あり



と火お投し或は海お洗め是處疎お基しおつるが
當社の傳記文書の乳一お傳へるものなり其後神威を
遠まし今の形とお似しといふ元和事申新お法供料の
地を寄附し多し享保年中 台命およりて御太刀
一口御馬一匹を寄附し後へ里 小倉より御太刀法
車油あり寶藏お法心 神威を崇揚 兼と御太刀
若橋廣持かもとを寄出さるる事あり

萩園集

掘貫 日村の田地浮洋田より川に流れて水漬多きを以て乳迄兼 官命
あり礦夫を授けて乳石を穿ち洞窟を通し悪水を流し水
く邑民の憂を消さるる方代不易
の良由とせり

高田浦 日村の海邊にて瀬戸の干あり
神光寺 日村の村にあり

弘長二年保田莊地頭丸島尉宗業が寄附状お記係お保田莊

内星尾之屋敷をさりて三寶お寄進しる所の四至境界事
東限系我莊境西限兼原田之西 一本の尾のをさりて山
みね 南限中山峯分 一ひのとありまてとすりてさりみす
北限在田川の北端 上の系兼兼莊ざりて下ハ西のさり
此内山川加定 東限八町二反 振おハ左針之地よりとい
とも梅尾の上人の法蓮院よりいふことよりいふ事あり
大形神法乳向のわたり仍ね傳の屋敷をさりて佛神
お寄進しるに己お母字を經畢云とありて其後星
尾とて号しお坊ありしお天正の兵火お懼る今も其
のし抄れ置 坊の名を中坊池坊南坊西坊角坊谷坊とい
ふ今もはお坊 又喜お神乳向の地お社を建てたるは
と兼お寄進する所の傍お卒堵塔を建てて法を表し
その碑若むしりさるるおおのふりていふより橋の夫

淨妙寺

小宮山にあり

藥師堂

圓形極極ハ青貝の海鏡金物と赤洞あり

多寶塔

八面塔の工の北にあり塔の頂に三尊あり

鎮守二社

山神 天 〇什物 兒女珠古面 右洞書體

縁起丁卷

天和の頃南宮の宿洞雲とて老孫花の亡失を嘆き

當寺々大同元年

牟珠天皇御母乙牟漏皇后の御遷

立ふとて

牟山ハ唐僧如寶和尚といふ七堂伽藍の古刹あり

吹上寺

牟山圭瑞和尚は寺を佛ハ境内を築地と

を

佛ハ境内を築地と

より

稱寺とカハ牟山和尚を中興の祖と

牟山

の極那ありては

飛鳥

飛鳥社

宮

宮

在

在

箕

箕

北

北

浦

浦

長

長

流

流

漾

漾

々

々

蕩

蕩

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

矢櫃浦



古岸風方歇浦烟
籠月微遙看一星
火知是夜漁歸
上街邦彦



と

宮崎氏のより南北間の軍記を見えん

大平地ふらぬ彼座の御兵

人名小書備へたる同太はひ神多の土人傳ふ嘉徳元年四月

當満全の第九馬射定範之地を願し珠と登村本築を子

孫宮崎氏と稱ひといふなり 兼久の礼本

近境と併せ本社佛寺等を創建せり 兼久の礼本

近境と併せ本社佛寺等を創建せり 兼久の礼本

近境と併せ本社佛寺等を創建せり 兼久の礼本

近境と併せ本社佛寺等を創建せり 兼久の礼本

近境と併せ本社佛寺等を創建せり 兼久の礼本

近境と併せ本社佛寺等を創建せり 兼久の礼本

近境と併せ本社佛寺等を創建せり 兼久の礼本

法寺當樂寺なる皆宮崎氏所縁あり

文書不見えんれば因ふたふ幾ん

今度於宮崎合戦を以て頼朝御程不及是球公就其

丹生園臨し中平為事知事復不入其跡古一職進返申付

事實也然上之弥控向後忠節なる行要は清公

大永二 十二月廿日

飯沼彦八殿

立神社 在中のメケ村の産神あり

在田川の流右と星尾村のより直中當社の東壁

岩の下を經く新堂村の下石峰のより流を

とよひ遊小社号ともなりと當社上より此地は

とよひ遊小社号ともなりと當社上より此地は



立念神社





後白河法皇
 御遊幸の
 紀系鹿
 山ふて平
 右近衛季子
 をなるとあ
 いづ子に
 れんが
 進歌を
 仕と

